

# 大川小津波避難に不備

## 石巻市教委が認め謝罪



遺族らへの説明会後、記者会見する境直彦教育長（右から2人目）。右端は柏葉照幸校長。22日午後、宮城県石巻市の飯野川第一小、吉本美奈子撮影



東日本大震災で児童74人と教職員10人が死亡・行方不明となった宮城県石巻市の大川小学校の惨事について、同市教育委員会は22日、児童の遺族らへの説明会を開いた。同校の津波避難マニュアルなどの不備を認め、「人災の部分もある」として謝罪した。

説明会は震災後3回目。前日から7カ月半ぶりで、被災した大川小が「間借り」している市内の飯野川第一小学校で行われ、父母ら約70人が出席した。

大川小が作成した地震・津波の発生を想定した「危機管理マニュアル」には、避難場所として「近隣の空き地・公園等」とあるだけで具体的な場所は明記されていない。また、市教委は、マニュアルの指導・点検をしていなかったこと、責任を認め、また、災害時に児童を引き渡すための保護者の連絡先などを記す「防災用児童カード」が配布・回収されていなかった

ことも明らかになった。

その上で、市教委は①避難場所を定めていなかったこと、高台避難が迅速に判断できなかった②教職員の津波に対する危機意識が低かった③過去の経験から安全と思いこみ、校庭に居続けた——と認定。市教委によると、津波で被災した石巻市内の小中学校のうち大川小を含む10校が、津波の際の避難場所を指定してなかった。

境直彦教育長は謝罪したうえで、「天災ということも考えられるし、学校管理下の大きな被災として人災という部分も考えられる。どちらかという判断はできない」と話した。当時、校内にいなかった柏葉照幸校長は「今回の事態は校長としての至らなさに原因がある」と述べた。

大川小の裏手には山があるが、地震発生から津波が襲来するまでの約50分間、児童らは校庭で待機させられ、直前に新北上大橋のたもとの三角地帯へ移動する途中で、津波に襲われた。

説明会では、当時、大川小にいて助かった教務主任の男性教諭が、昨年6月の説明会の前日に学校に送っていた、柏葉校長と保護者にあてたファクスが示された。それによると、教諭は裏山への避難を提案したが、職員の間から「この揺れの中ではだめだ」との声もあり、当時の教頭からも返事がなかったという。教諭は「想像ですが、教頭先生も迷われたのだと思います。ずっと強い揺れが続いており、道もない山に登らせるのをためらわれたのだと思います」「山に行きましよう」と強く言っていたらと思うと、悔やまれて胸が張り裂けそうです」と記している。

この日は遺族らから、説明会を報道機関に公開するよう求める声上がり、遺族の間で話し合ったうえ、初めて報道機関が会場に入って取材を行った。